

平成30年3月4日〔日〕
国立劇場小劇場

第四十八回

邦楽演奏会

明治一五〇年にちなんだ演目を中心に

完全入れ替え制・全席自由

第一部◎開場10時30分／開演10時45分

第一部は子供向けのプログラムです。

「親子で楽しむ邦楽演奏会」として開催いたします。

第二部◎開場13時／開演13時30分

第三部◎開場16時30分／開演17時

【主催】邦楽実演家団体連絡会議
出演団体

(一社)義太夫協会

清元協会

(二財)古曲会

新内協会

(NPO法人)筑前琵琶連合会

常磐津協会

(一社)長唄協会

(公社)日本小唄連盟

(公社)日本三曲協会

日本琵琶楽協会

【助成】東京都・(公財)東京都歴史文化財団

【後援】(公財)日本伝統文化振興財団

NPO法人子ども劇場東京都協議会

常磐津節

長唄

琵琶

義太夫節

清元節

小唄

一中節

萩江節

新内節

三曲



この演奏会は、「東京2020文化オリンピック」として実施します。
東京2020文化オリンピックは、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の開催に向け、文化芸術の力で地域を活性化し、若者の参画促進や創造性を育むことで、2020年から先の未来に日本や世界の文化を継承していくことを目指しています。

ご挨拶

本日は二〇一八都民芸術フェスティバル参加公演「第四十八回邦楽演奏会」にお越しいただきまして誠にありがとうございます。

本演奏会は昭和四十六年から継続して開催し今回で第四十八回を数えます。多くのジャンルの邦楽を一度に鑑賞できる演奏会としてご評価いただき、毎回お越しいただくお客様も数多くおられ、主催者として深く感謝いたしております。

さて、今までの演奏会は第一部、第二部の二部構成としておりましたが、今回は三部構成とし、第一部を親子で楽しむ邦楽演奏会として開催いたします。昨年は第一部前半を子供向けの番組として開催したころとても好評をいただきましたので今回は独立して第一部として企画した次第であります。邦楽の雰囲気のできるだけ多くの子供に味わってもらい、将来の邦楽ファン作りの一助になればと期待しております。第二部、第三部では本年が明治一五〇年に当ることから副題を「明治一五〇年にちなんだ演目を中心に」といたしました。各ジャンルとも明治時代に作曲された演目や明治にまつわる出来事などをテーマにした演目を主に選んでお聞きいただけます。この機会に我が国の歴史や皆様のご家庭における明治時代の出来事などに思いをはせるよすがとしていただければ幸いです。

今回はナビゲーターを平野啓子さんをお願いいたしました。

ご来場の皆様には十分にお楽しみいただける様に主催者一同注力していく所存でございますが、不行き届きの点につきましては何卒お許しいただきまして、どうか最後までごゆっくりとご鑑賞下さいますようお願い申し上げます。

邦楽実演家団体連絡会議 議長 川瀬順輔

第48回 邦楽演奏会



第二部

13時13時開演

三曲 嵯峨の秋.....2

一中節 松襲.....4

義太夫節 良弁杉由来.....6
東大寺の段.....

琵琶 彰義隊.....10

常磐津節 戻橋.....12

新内節 明治一代女.....15

三曲 嵯峨の秋

箏替手

山川園松

小田園和佐

五島園奈美

箏本手

山川芳子

百崎園喜彌

徳広園初音

山川園和光

長岡園美咲



解説

大阪の菊末検校が明治の初めに作曲したもので、器楽性が際立つ手事物形式の箏曲。「平家物語」巻六の「小督」から題材をとり、秋の月の明るい晩に源仲国が天皇の命により、もの寂しい嵯峨野へ小督の局を捜し尋ね、局がつま弾く箏の「想夫恋」が聞こえてくる場面を歌っています。

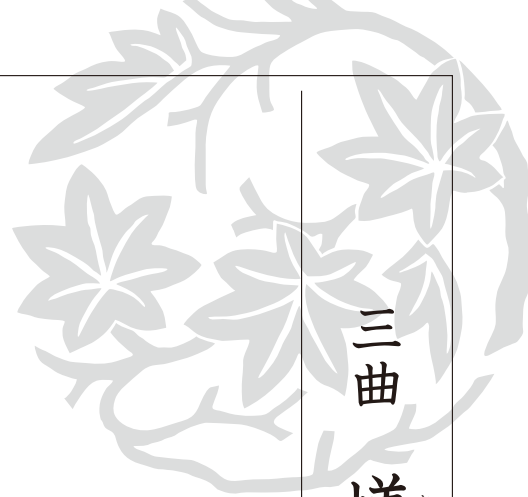
手事部分は三段に分かれており、本手、替手の高低の合奏でとても華やかな曲調となっています。



詞章

嵯峨の秋

さらでだに、
ものの淋しき名にたてる、
嵯峨のあたりの秋の暮、
月は隈なき柴の戸に、
忍びて漏らす箏の音は、
峯の嵐か松風か、
尋ぬる人のすさびかや。
駒をとどめて聞く時は、
つま音しるき想夫恋、
つま音しるき想夫恋



三曲 嵯峨の秋

箏替手

山川園松

小田園和佐

五島園奈美

箏本手

山川芳子

百崎園喜彌

徳広園初音

山川園和光

長岡園美咲



山川園松（やまかわ えんしょう）
昭和二十年生まれ。四歳より父初代山川園松に手ほどきを受ける。中能島欣一、初代富山清琴に師事。NHK邦楽技能者育成会卒業。公益社団法人日本三曲協合理事、山田流箏曲協合理事、目黒区邦楽連盟会長。春和会主宰。

一中節

松襲まつがさね

浄瑠璃

宇治紫文

宇治紫希

宇治紫有

三味線

宇治紫卯

宇治紫津

宇治紫織

解説

この作品は文化三年（一八〇六年）初世菅野序遊すがのじょゆうの作曲。正月のお弾初めに作られた歳旦浄瑠璃での色の変わらぬ松の緑の目出度さを全盛の太夫と廓の情景に写して正月に相応しい目出度さを祝う作品に仕立ててあります。

三味線の名手と謳われた初代序遊ならではの作曲を思わせるものがあります。

詞章

松襲まつがさね

調、へ松根に據れば深緑し、萬花開けて 浄瑠璃、へ御代の春。へ有難や民も恵みの

永き日に、植ゑ初め給ふ御神も、夫婦と現じ相生の、松はめでたき世の例。二葉の色に末かけて、五葉に此へ里の名も、五三の君が昔より、勤と言ふも品変る、中に姫松執成さへも、初音床しき鶯の、未だ床馴れぬ藪の梅、霰降るらし御山の霰。千代の古道幾代経る、庭の焚火や神楽歌。三下り、へ文にも松の色見えて、屠蘇の香匂ふ盃も、早や住の江や高砂の、松は太夫の八文字、裾に霞の禿松。通ふ千鳥か恋の海。逢ひ度いのはた打越して、ナオス、へ松を花とはさりととは、さりととは喃なう良い首尾の松、嬉しさの君と子の日の小松曳。合、へ雅交して松襲、裏紫もか言なる、松も舞子のざざんぞ。濱松風の音はざざんぞ。

へ丁固が夢の迎ひ酒。仄々の磯後朝に、又十返りの約束も、心浮き立つ若緑。緑と榮え榮ふなる。十八公の粧ひに、千歳の操を表はして、変らぬ色の睦し月、萬々歳とぞ祝しはる。



宇治紫文（うじしぶん）

一中節宇治派浄瑠璃方。人間国宝。昭和十九年から山田流箏曲を中田博之に師事。昭和三十三年に六代目紫文に師事し昭和三十九年に宇治文彩の名を許される。平成四年に七代目紫文を襲名。平成九年に紫綬褒章受章。平成十一年に重要無形文化財保持者（人間国宝）として各個認定される。平成十六年に旭日中綬章受章。



宇治紫卯（うじしう）

一中節宇治派三味線方。始めは長唄を学んだ後、一中節を七世宇治紫文より学ぶ。平成二十三年に宇治紫卯の名を許される。古曲演奏会、古曲勉強会にてタテ三味線を務める。

義太夫節

良弁杉由来 東大寺の段

浄瑠璃

竹本綾之助

三味線

鶴澤津賀花



竹本綾之助（たけもとあやのすけ）

（一社）義太夫協会理事。義太夫節保存会理事。平成十二年重要無形文化財義太夫節保持者総合認定。NHK邦楽育成会第十期卒業。三代目竹本綾之助に入門、竹本綾一を経て十四年四代目竹本綾之助襲名。二十三年旭日双光章受章。



鶴澤津賀花（つるざわつがはな）

平成十年竹本駒之助に入門。十三年初舞台。十八年文化庁新進芸術家国内研修員として六世鶴澤燕三に師事。二十一年日本伝統文化振興財団「邦楽技能者オーディション」合格。二十三年清栄会奨励賞受賞。二十九年松尾芸能新人受賞。

解説

作者未詳とも二代目豊澤團平とその妻千賀の作とも言われています。明治二十年（一八八七）大阪稻荷彦六座にて初演。「壺坂観音靈驗記」とともに、明治時代に書かれた義太夫節の名作です。物語は東大寺の「良弁杉」の故事が元になっています。菅原道真の臣下水無瀬の死後、妻の渚の方は近江志賀の里で息子光丸を育てておりました。ところが光丸二歳の折、茶畑で驚にさらわれてしまいます。半狂乱で諸国を尋ね歩き、みすばらしい身なりとなった母は、三〇年という年月の後、乗り合わせた船で「東大寺の良弁僧正は、幼い頃驚に運ばれ杉の梢で見つかった」という話を聞きます。その話に一縷の望みをかけた母は、杉に尋ね札を貼ることで、名僧となった息子と再会を果たすのでした。「東大寺の段」は、東大寺を訪ねた母が、門前で出会った僧の知恵から、毎日杉の前で足を止めるという良弁の目に留まるようよう、尋ね札を貼るまでのやりとりが描かれています。

詞章

良弁杉由来 東大寺の段

急ぎける

名に高き名も南都の大寺院、時の帝の勅願所、宗法広き東大寺、玄関先の切石に影をとどめし打水に、引絞りたる紫の、幕も雲かといと尊き、大門先の下馬札に、乗り放したる馬廻り、供待ちの諸士徒の者、武家公家の御代参、出入りも繁き盛砂に、門前狭しと待ちいたる。老いの身の昔の姿いつしかに、われにもあらで幾歳を、いずくの浦にさ迷いし、乱れ心の夢覚めて、それぞと思う人伝も、心のままに奈良坂や、漸うここに渚の方、大門近く歩み寄り、杖をとどめて独り言、「淀の渡りの船中にて、人の噂にはるばると又さまようて漸うと、来ごとは来ても浅ましい、乞食非人のなんとして、誰に頼りて問うことも心細や」と伸び上り、見回し見回しそここのこと、寺内の様子よそながら、伺い見れど厳かに、寄り付くことも浅ましき、わが身のように気遅れし、思案も出づる涙さえ、胸にせまりていたりける。折から寺の門内を小走りに急ぐ伴僧が、こなたへ歩み

来かかるを、見るに嬉しく老女は駈け寄り、おずおず前に這
いがみ、

「率爾ながらお見かけ申し、わりない御無心、お情け」

と云うに、伴僧立ち留まり、

「ア、コレコレコレつかしやるな、つかしやるな非人殿。お
上人様の御用で四条まで急ぎのお使い心がせく。ことさら愚
僧は今ここに持ち合せもござらぬほどに、後で庫裏の男にい
いつけ、お鉢落し貰うてやる。そこ退かしやれ」

と行き過ぎる。袖を控へ手をつかえ

「ア、イエイエ私がお願いは、御報謝お手のうちではござり
ませぬ。憚り多きことながら、私は近江の国志賀と申すここ
ろの者。二歳の男子を驚に取られ、われはそのまま狂人とな
り、諸所方々とさまよううち、このほど淀の渡りにて乗り合
人の噂には、南都東大寺の良弁大僧正様は稚ない時、驚に取
られ助かり給う御方と、聞くにつけても心の迷い、かほど尊
き御方の、われわれづれの子ではないとは思えど晴れぬ親心。
どうぞ御慈悲に僧正の御身の素性御存じなら、お聞かせなさ
れて下さりませ」

と言うも涙の雨やさめ、嘆き頼むぞ哀れなり。伴僧つくづく
非人の体打眺めて不審顔。

「オ、なるほどなるほど。おことが今の物語り、毛微塵違は
ぬ御上人様の御身分。聞けば聞くほど笑止なこと。さりなが
ら、われらも日毎に御顔は拝めども、なかなかお傍へ出るこ
と叶わず、まずお傍には御用人、近習、茶小姓、お取次、関
白大臣、御摂家方、御目通りは白書院、黒書院、対面所、な
かなか近寄ることならず、というてこなたの歎き。それとは
なしによそながら、お尋ね申すよい思案が、コウツト待たし
やれや、なんとか工夫があれかし」

と丸い頭を右左、振り廻しちようと手を打ち、

「オ、思いついた。さても智恵かな。サ、マ分別かな。ア、
これより他に思案はないわい。エ、僧正様には御役目にて日
毎に春日の御社へ御礼拝を遊ばすじゃ。その御下向には二月
堂、御礼が済めばその昔、驚に捕らわれ危うくも梢に留まり
し折も折、前僧正の通り給い、お助けありし杉の木へ日毎に
参詣遊ばすゆえ、こなたの身の上、そうしてまた、驚に取ら
れたわが子の様子、詳しく書いて杉の木へ張り付け置かば、

お目にも留まろう。モこれよりほかに思案はない」

と人を助ける出家こそ、いと懇ろに氣を付くれば、老女は嬉
しく手をつかえ、

「かく見苦しき老いの身を、不憫と思し下されて、御親切な
る御心添へ、ありがとう存じます。したる紙硯また筆の用意
もあらばこそ、もとより老いの寄する波、文字の分かちもや
つればて、なにをよすがに書留めん、心細さ」

と打ちしおれ歎けば、伴僧打ちうなずき、

「なるほどもつとも実に理。ア、わしも思わぬかかり合い。
オ、よしよし幸い矢立も紙もあり、わしがこなたになり代り、
詳しくう書いてやりましょ」

と氣もわさわさと懷の、紙に委細をさらさらと筆に情けをふ
くみ墨。書きしたためて手に渡し、

「ソレ今言つたとおり杉の木元へ、べったりと随分お目に
留まるよう、張り付けておかつしやれや。しかしこうこうし
た坊主が書いた教えたど、かならず人に言うまいぞ」

「エ、勿体ない。お情け受けたその上にお世話になり、死ん
でも御恩は忘れませぬ。エ、ありがとうござります」

と嬉し涙にくれぐれも悦び勇めば、

「エ、なんのいのう。袖ふり合うも他生の縁だにあらば、ま
た重ねて」

「おさらば」

「さらば」

と伴僧が、引き別れつつ老いの身の心のやるせ竹杖に、力も
なげにたどたと、二月堂として





琵琶

須田 誠舟



須田 誠舟（すだ せいしゅう）

昭和二十二年東京生まれ。辻靖剛に師事し薩摩琵琶の指導を受ける。昭和四十五年日本琵琶楽コンクール第一位。文部大臣奨励賞受賞。金田一春彦に師事し、平曲の指導を受ける。国立劇場「邦楽鑑賞会」、能・狂言・平曲による「平家物語の世界」、NHK「地域伝統芸能祭り」「にっぽんの芸能」等に出演。日本琵琶楽協会理事長。薩摩琵琶正絃会理事長。

解説

この歌は慶応四年五月、上野寛永寺に集結して官軍に抵抗し、力およびずして敗れた彰義隊の最期を歌った曲。三百年にわたり徳川の家臣として仕えた三河武士にとって、徳川幕府が音を立てて倒れていくのをただ見過ごす訳にはいきませんでした。上野の山に立てこもった二千人の彰義隊は、負け戦を覚悟の上で、およそ十倍の兵力を擁する、大村益次郎指揮の官軍に戦いを挑みました。五月十五日早暁、官軍の砲火によって始まった戦争は、彰義隊の決死の働きによって夕暮れまでは持ちこたえましたが、遂に力尽き一日で上野の山は官軍の手におちたのでした。一五〇年前の両軍の壮絶な戦の様を薩摩琵琶の勇ましい語りで歌い上げています。

詞章

彰義隊

人の車に乗るものは、人の憂いをのせ、君辱めを受くる時は、臣すなわち死すとかや、慶応四年初夏の頃、徳川三百年の覇業亡び、先の將軍慶喜公は、責を一身に負ひ、上野東叡山に閉居して、恭順罪を待たれしが、やがて江戸城の明け渡しと

なり、公はその罪を減ぜられ、水戸へぞ幽居せられ給ふ、昔

忍ヶ丘の辺に、集まる旗本数千の士、王師に向ひ奉らん、不遜の心にあらねども、三百年来主家の恩、葵の葉陰に隠れつつ、忠勇無双の名を得たる、三河武士の末として、一矢も引かでおめおめと、この城下をば渡すべき、刀に手をだにかげずして、このところをば去らるべき、況や思へばこの丘は、忝くも東照る、神の社のある所、手を懐に見るべきやと、言はず語らずむらぎもの、心あひたる武夫が、彰義隊と名づけつつ、勇む様こそ雄々しけれ、天野八郎以下勇士の面々は、東照宮祠を中心に、四方に備へを打ち立てたり、勝敗は必ずしも、衆寡に因って定まらずとはいへ、敵は王師の名の下に、はやりにはやる無数の勢、我は僅かに上野山、方里に足らぬ小天地、志こそ等しけれ、言わば孤軍の小勢なり、輪王寺の宮こそおはせ、朝敵の名をさへ負ひたれば、勝算なきは覚悟の前、とび来る矢玉に楼閣焼け、とどろく響きに柱石砕け、電光石火死傷無数、血は不忍の池を染め、屍は山上の樹根にうづだかし。

戊申五月此山中 劫火烧天草木紅
志士喪元一死甘 臣身報主孤忠表
当知百万戦計尽 坐受三軍四面攻
靈鬼今尚夜哭矣 啾啾萬岳悲風動

常磐津節 戻橋 もどりばし

浄瑠璃 常磐津 津太夫

常磐津 光勢太夫

常磐津 松希太夫

三味線 常磐津 菊志郎

常磐津 菊与志郎

岸沢 式明



常磐津 津太夫（ときわずつだゆう）

昭和十一年茨城生まれ。三味線が好きで常磐津文左衛門の内弟子となり、声が出た事や、太夫不足等で春衛太夫に、後に津太夫となる。邦楽番組、歌舞伎、舞踊会など数多く出演。重要無形文化財常磐津節（縦合認定）保持者。常磐津節保存合理事。常磐津協合理事長。旭日奴光章受章。



常磐津 菊志郎（ときわづきくしろう）

昭和十五年東京品川生まれ。昭和二十九年常磐津文左衛門師に三味線方として入門。昭和三十二年三月二代目常磐津菊志郎の名を許される。昭和三十五年NHK邦楽技能者育成会第六期卒業。平成十二年重要無形文化財総合認定保持者認定。平成二十三文化庁長官表彰。平成二十五年旭日奴光章受章。常磐津協会、常磐津節保存会の演奏、各派舞踊公演の演奏などに出演。常磐津協会常任理事。



【作詞】河竹默阿弥

【作曲】六世岸澤式佐

源頼光の四天王の一人、渡辺の綱が、主君の使を帯びて、夜、洛中一条戻橋の辺まで来た時、道づれになった扇折の娘の容姿を、月に映る水鏡に怪しみ、舞の手振は優しくとも、実は鬼女の変化である事を見ぬき、髭切の太刀の威徳をもって片腕を斬落とす一段です。明治二十三年歌舞伎座に於て、五世尾上菊五郎がこの演目を「新古演劇十種」の内に蔵めて初演しました。



詞章 戻橋 もどりばし

へそれ普天の下卒土の浜 王土にあらぬ所なきに何処に妖魔の住みけるか 睦月の頃より洛中へ 悪鬼頭われ人を取り
夜は往き来の人もなし
へ女性は扇借り受けて 会釈をこぼし進み出て
へ空も霞みて八重一重 桜狩りする諸人が
へ群つっこへ清水や 初瀬の山に雪と見し 花の散り行く
嵐山惜しむ別れの春過ぎて 夏の初めに遅れにし 花も青葉に衣更え 樹樹の緑の美しや
綱「いや面台き事なりしぞ斯かる技芸のある者を妻に持ちなばよき楽しみ」
へいうを此方はよきしおと
小百合「定めて、あなたは奥様をお持ちなされてでござりましょうな」
綱「いまだ妻は娶らぬが見らるる通りの武骨もの 誰も妻になり手がない」
小百合「なにない事がござりましょう」

へお情深きお心に 今宵見えしわらわさえ 縁を結ぶ露もが
 な 思う恋路の初螢 言い出で兼て胸焦がし 若業の闇に迷
 うもの都上臈は取分けて、姿やさしき花あやめ 引きつひか
 れつ沢水に 袖も濡れにし事ならん
 綱「それは御身の思い違い かかる名もなき 田舎武士 誰が
 思いを掛けようぞ」
 小百合「いえいえ立派な御名ゆえに」
 綱「なに立派な名とは」
 小百合「当時内裏を警衛に都へ登りし源の頼光朝臣の身内に
 て渡辺源氏綱殿ゆえ」
 綱「や如何いたして其名をば」
 小百合「恋しく思う殿御ゆえとくより存じておりまする」
 綱「恋しく思うというは偽り 御身が我が名を存ぜしは 妖
 魔の術であろうがな」
 へ星をさされて打ち驚き
 妖女「なに妖魔の術とは」
 綱「眉目よき女に化すると其本性は悪鬼ならん」
 妖女「何と」
 綱「汝は心付かざりしか 月の光にうつりたる影は怪しさ鬼

形なりしぞ
 妖女「やあ」
 綱「その本性を顕わせよ」
 へいうに妖女も忽ちに ふん怒の相を顕せば 後ろに窺う郎
 党が 観念せよと組付くを 事ともなさず振り払い
 へ我は愛宕の山奥に いくとせ住みて天然と 業通得たる悪
 鬼なり
 車輪の如き目を見開き 炎を吐きし有様は 身の毛もよだつ
 ばかりなり
 綱「さてこそ悪鬼でありしよな」
 妖女「いで此上は汝をば我が隠家へ連れ行かん」
 綱「小癩な事を」
 へ引立て行かんと立ち掛ければ綱は生捕りくれんと 勇力
 ふるう時しもあれ
 へ一天俄にかき雲り 震動なして四方より黒雲覆い重なりて
 綱が襟上むんずと掴み
 へ砂石を飛ばす暴風につれて虚空へ引き上ぐれば
 へ鬚切りの太刀技き放ち 鬼の腕を切払い どうと落ちたる
 北野の廻廊 悪鬼はむらがる雲隠れ光を放ちて失せにけり

新内節 明治一代女

浄瑠璃 富士松 鶴千代
 富士松 鶴 芭
 富士松 鶴志雅
 富士松 鶴鋭美
 新内 勝一朗
 三味線 新内 勝一朗
 上調子 新内 勝志壽



新内勝一朗（しんない かついちろう）
 新内節勝新派家元、新内協会理事。
 祖父・富士松志賀三郎、父・新内勝一朗。
 六歳より父に指導を受け、昭和四十六年新内勝次朗の名を
 許され、平成二年新内誠十朗と改名。平成十三年二世新内
 勝一朗を襲名。平成二十年財清栄会奨励賞を受賞。



富士松 鶴千代（ふじまつ かつちよ）
 新内千歳派家元、新内協会理事。昭和三十九年歌舞伎座出
 語公演。昭和四十六年三越劇場初独演会。昭和五十年新橋
 演舞場「鶴千代の会」。昭和五十三年パリ海外公演。昭和
 五十六年家元襲名披露歌舞伎座公演。昭和六十年三十周
 年記念歌舞伎座公演。平成元年歌舞伎座公演出語り。松竹
 賞受賞。平成十二年歌舞伎座出語り。平成二十六年国立劇
 場八十八回公演。三越劇場をホームグラウンドとして平成
 二十九年九十四回目「鶴千代の世界」に至る。



解説

新内で最も普及している酔月情話の花井お梅と題材は同じであるが、川口松太郎先生が書下し、新生新派で故花柳章太郎、大矢市次郎丈が演じて、お馴染み深くなっています。酔月情話の峰吉は小悪党であるが、ここに登場する巳之吉は、途に純情な男で、叶家のお梅の可憐さに引かれた沢村仙之助、その板挟みになる女心、その恋の葛藤と、人情の機微が浮彫にして書かれています。

第一場 浜町河岸

- ・花井お梅……浜町酔月楼の女将
- ・箱屋巳之吉…元、沢村仙之助の男衆
のち酔月楼の番頭

・俤夫善吉

第二場 お梅の実家

- ・沢村仙之助（太夫）
- ・母親 ・父親 ・お梅の妹

第三場 改名披露 新富座の楽屋口

- ・沢村仙之助（太夫）
- ・花井お梅
- ・男（弟子）衆



詞章

明治一代女

― 第一場 浜町河岸 ―

へ追うて行く 灯入りの遠見 右に見て 吹雪に荒れる浜町河岸 走る車の小提灯 へ後追いついて巳之吉は車の梶棒しっかと押さえ

巳「お梅さん、俺だ、巳之吉だ、ちょっと車を降りて おくんなせい」

俤「何だ巳之さんじゃないか 車を降りろったってこの雪の中 姐さんが降りてあるけるもんかい」

巳「善さん お前の知った事じゃねえんだ

姐さん 姐さん」

梅「巳之さんかい」

巳「こんなにお前を探しているのに何故逃げるんです」

梅「誰も逃げやしませんよ 今夜は忙しいから後で内のほうへ」

巳「手間取らせねえから、ちょっとの間、降りておくんなさい」

梅「善さん、降ろしておくんなさい」

俤「だって姐さん、この雪の中」

梅「いゝんだよ、どうせすぐだから 雪見をしながら、ぶら／＼歩く お前済まないが一足先行って、すぐ伺うから」と断ってきておくれ」

俤「へい承知しました けど ようがすかい」

梅「なあに 大丈夫さ」

へ心配そうに俤夫善吉、梶棒取って急ぎ行く

へ後に二人はじりじりと

梅「巳之さん 用を早く言っておくんなさいよ」

巳「用を？お前さん はっきり分かっているはずだ、恨みの数はいろ／＼あるが、もう何も言わねえ 今夜このまま一緒に往っておくんなさい」

梅「一緒に往って 何処へ」

巳「約束通り芸者やめて あたしと一緒に夫婦になって暮らしておくんない」

梅「約束は守ります、私にも望みがあるからそれまで待っておくれ」

巳「その望みてえのは、太夫の名前替えの披露でございましょう、エ姐さん そうなんでしょう」

梅「巳之さんどうか察しておくんない」

巳「太夫とはきっぱり 別れると言ったのは アリア噓だっ

たんですか、こんな事 言いたくねえが、親譲りの田畑残らず売り払ってお金の工面をして来たのは あんたの意地を立てさせた上、芸者をやめて夫婦になって下さるのを、たった一つの楽しみにしてきた 私だ」

梅「巳之さん 堪忍しておくんない。千円のお金はお返しします」

巳「金を返す 姐さん そりゃ何て言い草だい 今更金を返してもらってどうなるんだ。それより太夫と別れて あたしと夫婦になって暮らしておくんなさい」

梅「それが出来る位なら、とっくに別れています。太夫の名替えに使ったお金きつとお返しします。」

巳「姐さん お前」

梅「あれ巳之さん何をするんだ あぶない あぶない」

巳「俺をだましたひとでなし」

へ声もろともに 巳之吉が隠し持ったる光り物 無二無残に突きかかる

へお梅の身体と打ち重なり どっと倒れば誤って 己が胸をば突き通し ウム／＼

梅「巳之さん 堪忍して あたしやどうしても 太夫とは…

あつ巳之さん」

へこけつまろびつ 吹雪のなか 筑波おろしの浜町河岸
足もしどろに

― 第二場 お梅の実家 ―

へ辿り行く

仙「おっ母さんは今警察で言ったように 本当のお梅の行方は知らないんですか」

母「太夫 貴方にはお話ししなければならんですが 巳之さんを殺したあとで ここへ立ち寄りました」

回想

梅「母さん！ 自首するのは判っています」

母「女だてらにその様な大それた事を仕出かしてのう父さん」

父「俺も士族の肩書付き、コレ娘、お手入れのないうち、早く名のって出てほしい」

梅「あと五日経てば、新富座の初日が開く こんな苦勞をした太夫の名前替えの舞台を見ないうちは死んでも死にきれないから、五日の間姿をくらまして・・・」

妹「姉さんは、年が明けて初日が出たら よそながら太夫の姿を見物して自首して出る」

母「それまでは何と言われても知らぬ存ぜぬで通してほしい

そう言い残してあの娘は雪の中を出て行きました」

仙「それじゃ 元日の初日にゃ 必ず芝居へやって来ますね」
妹「姉さんは、たとえ大入場の隅からでも 太夫の舞台を見物して 名乗って出る気でおりましょう」

仙「可哀相に この寒空に何処をさまよっていることか」

母「そう思いますと 私は居ても立っても居られません」

仙「おっ母さん、あんまりくよくよしなさんな 巳之吉のほうから斬りかけてきたのなら 罪に落ちても大したことはあるまい 初日にゃ芝居中しらみつぶしに捜して 私も付き添って自首させる 後々のことは 心配しなさんな」

母「ありがとうございます」

― 第三場 新富座楽屋口 ―

へ正月新富座の初芝居

中に沢村仙之助 改名披露の舞台着の 色袴を身につけて
あァ 思えば思えばいとおしや この口上的一幕を どこかの隅で見たい為 思わずうるむ目頭を

男「旦那 お梅さんが お梅さんが」

仙「来たのか お梅がきたのか」

男「へい見えました」

仙「ど どこだ どこだ おお お梅！」

へ鹿の子模様の のれんの外 お高祖頭巾に顔かくす 着物の裾もほころびし 姿寂しき 叶家お梅

仙「おい のれん口を締めておけ、お梅見てくれ 俺らの改名口上の姿 こりゃみんな お前の心尽くしで出来た姿だ

お前の力で津の国屋は師匠の名跡が継げるんだ おいらァ何も言わねえぞ よく無事でいてくれた

梅「太夫 私を怒ってはいらっしやいませんか」

仙「馬鹿言えー たどえお前がどんな罪を犯そうと 俺は決してとがめはしねえ 俺の女房はお梅と決めている」

梅「はい」

仙「今日はお前がこの小屋へ来ると信じていた よそながら口上の姿を一目見た上で名乗って出る気でいたんだろぅ」

梅「はい そればっかりを楽しみに五日の間 逃れ逃れておりました」

仙「無理はねえ無理はねえ こんな苦勞をさせたのも ほととは言えば みんな俺だ」

梅「いいえ太夫」

仙「堪忍してくんねえ お梅」

梅「太夫」

男「旦那 旦那 まわりでございます」

仙「お梅 出だぜ 一世一代の晴れの舞台だ」

梅「どこかの隅で見物させていただきます」

仙「一生の思い出に 心を静めてとっくり見るんだ」

梅「はい」

仙「口上の舞台を済ませたら、俺が一緒に付き添って行ってやるから立派に警察へ自首して出るんだ

梅「太夫が行って下さいますか」

仙「行ってやる」

男「旦那 サ早く サ早く」

仙「お梅行ってくるぜ」

梅「太夫 切り火を」

仙「一世一代の めでたい門出だ 笑ってくれ 笑って楽屋を送り出してくれ」

梅「はい」

仙「笑ってくれたね お梅」

梅「嬉しいんです 太夫」

へ又も涙のその中を 冴えて聞こゆる片しやぎり 赤毛毛氈 金襴 派手な舞台のその裏に 哀れをとどむ川口の 隅田川に流す 新内の節に合わせて書き残す

第48回 邦楽演奏会



第三部

17時開演

清元節

青海波

21

萩江節

深川八景

23

小唄

花筏／明治は遠く
雪は深々／座敷や引け過ぎ
梅は咲いたかあさりとれたか

25

新内節

十三夜

28

義太夫節

壺坂観音霊験記

沢市内の段

31

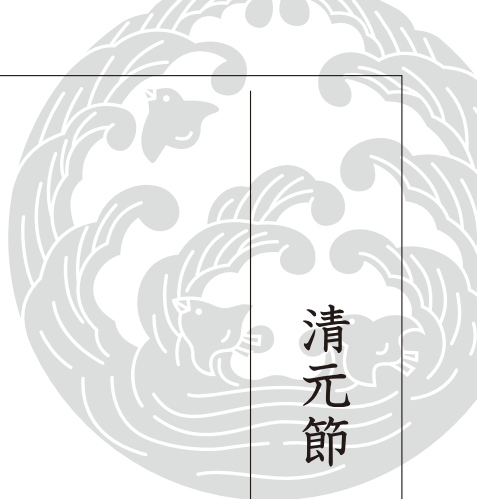
長唄

元禄風花見踊

35

清元節

青海波



浄瑠璃

清元延栄一

清元延明寿

清元梅美紀

清元延美夏

三味線

清元延秀佳

清元香葉

清元延知寿



清元延栄一（きよもとのぶえいち）
東京神田生まれ。幼少より清元延栄喜美師に師事し、昭和四十五年六世清元延寿太夫師より「清元延栄一」の名を許される。平成元年清元志寿太夫師に師事、清元栄三郎師に師事、平成八年より清元美治郎師に師事、宗家演奏会、和加葉会、都民フェスティバル、放送等出演。早世した父（清元栄一）が五世家元より許された「清元栄会」を受け継ぎ主宰。カルチャースクール等清元普及活動に務める。
清元宗家高輪会会員。清元協会会員。



清元延秀佳（きよもとのぶひでか）
母、清元延栄秀、清元延初代師、清元栄治師に師事。青洲会を主宰。稽古に努めている。清元宗家の会、清元協会演奏会、和加葉等出演。
目黒区邦楽連名理事。清元協合理事。平成二十六年重要無形文化財（清元節）総合認定。



【作詞】永井素岳

【作曲】二世清元梅吉

【初演】明治三〇年（一八九七）六月両国の中村楼にて五世清元延寿太夫襲名披露の折に『柏の若葉』と共に開曲された御祝儀曲。清元の定紋である青海波に因んで四方を海に囲まれた日本の松島をはじめに語り出し、清元の流儀の栄えを祝う詞章で締めくくられています。明治時代の代表作として愛好され、後に振り付けられ、舞踊御祝儀物として屈指の作品とされています。



詞章 青海波

へ神代より光り輝く日の本や へ千珠満珠の世語りを、今に
伝へて松島の へ眺めはつきぬ春の日の、潮の干潟をゆく袖
に、うつす薫りも懐しき 梅の花貝桜貝 みるめの磯のあか
ぬなる 花の跡踏む夏山の、筑波が覗く船の中、へ逢瀬の浦
の私語 いくつか浮名も立浪の うちこんでいる真心に 待つ
とは恋の謎々も、解けた素顔の夏の富士 其通路は星合の、
中かけ渡す鵲の へ天の橋立きれ戸とは 裏表なる播磨潟
へアラめで鯛は、神の代に 赤目と召され初めしより、蛭子
の神の釣り上げし 二世のかための懸鯛に、縁を繋ぐ諸白髪、
若やぐ尉と、うば玉の 闇の景色は漁火の、ちらりちらちら
月の出潮に 網引の声の、節も拍子も一様に へヤンラ、月
の名所は、余所ほかに、鳴いて明石の浜千鳥、ヤサホウく
ぬしに淡路は気にかゝる 室のとまりを、ソレ松帆の浦
よ、ヤサホウエンヤく 面白や、へ波も静かに、青きが原を、
なかにひかえて住よしと 名も高砂の女夫松 雪にもめげぬ
深緑、 栄ゆく家の寿を なほ幾千代も延ぶるなる、直な心の
清元と 目出度く祝ふ泰平の、君が余沢ぞ有難き

萩江節

深川八景

浄瑠璃

萩江 佐記

萩江 しげる

萩江 七重

三味線

萩江 八千代

萩江 季代乃

萩江 朋音



萩江 八千代（おぎえやちよ）

萩江節三味線方。重要無形文化財「萩江節」総合指定保持者認定。昭和五十三年河東節の六世山彦河良に入門後、山彦節子、山彦貞子に師事。昭和六十三年、萩江てい師により萩江八千代の名を許される。平成十二年（財）清栄会奨励賞。平成十八年重要無形文化財「萩江節」総合指定保持者に認定。平成二十一年重要無形文化財河東節三味線保持者（人間国宝）認定。平成二十六年旭日小綬章を受章。



萩江 佐記（おぎえさき）

萩江節浄瑠璃方。重要無形文化財「萩江節」総合指定保持者認定。浅草生まれ、宮園節、萩江節を実母である萩江加寿、初代宮園千碌に入門し、本格的に古曲の勉強を始める。平成十四年に重要無形文化財「萩江節」総合指定保持者に認定。平成十九年重要無形文化財宮園節浄瑠璃保持者（人間国宝）認定。平成二十七年旭日小綬章を受章。



解説

荻江節の曲名。一八七六年（明治九）四世荻江露友の襲名披露に演奏された曲といわれます。江戸深川の名所（永代橋の水鏡、永代寺の晩鐘、冬の木場、塩浜、仲町、洲崎弁天、佃の雨、深川八幡宮）を近江八景になぞらえ、春夏秋冬の四季の景色の移り変わりを歌っています。曲調は三下りで、前弾には「佃の合方」を取り入れ、深川の川端の描写を行い、短い合方のなかにも、三味線の主旋律と上調子を効果的に絡ませています。全体に粹な雰囲気をかもし出した荻江節を代表する曲です。



詞章

深川八景

三下り、へ四季の姿の様々なれや、月雪花の顔と顔、目馴れて香りに滞み、へ眺多かる其中に、屏風に写す深川や、填りて濡るる袖が浦、入り来る帰帆の数々に、へ永代橋の水鏡、合、写せば映る曇らぬ天下、一の鳥居の夕照は、家並静かに

小唄 花筏／明治は遠く他

（舞台面・①～⑤演奏順）

糸松峰 照

替菊岡 弘優

唄 春竹 利昭

井筒 幸一

③雪は深々

蓼 房まさ香

④座敷や引け過ぎ

糸吏美 いち絵

①花筏

唄 千紫 巳恵佳

長生 恭帆

糸 田毎 てる幸

花菱 朝佳

唄 田毎 てる三

本木 寿以和

②明治は遠く

⑤梅は咲いたか

あさりとれたか



田毎 てる三（たご てるぞう）

田毎派家元。昭和三十七年田毎派二代目家元襲名。平成六年第十一回浅草芸能大賞奨励賞受賞。NHK芸能百選、芸能花舞台等多数出演。公益社団法人日本小唄連盟参与。



春竹 利昭（はるたけとしあき）

公益社団法人日本小唄連盟会長。春竹派家元。昭和三十九年春竹派創立。昭和四十八年清元幸寿太夫を名乗る。清元宗家高輪会理事。清元協会理事。

鄙寂で、又一入の、へ永代寺の晩鐘、合、聞いて驚く鳥もなし。
冬の木場には雁落ちて、類薺の春景色。
あれ見よさんさ、是見よさんさ、さんさやんさで走る笹舟。
合、へ客は艀拍子面楫や。
取り楫、舟は変わると主変わらずに、来てくれ河岸にそれぞれ舟が、へ月円かにや塩浜の、
秋は短き夜半なりと、思ひ合うたる仲町の、そもや土橋の渡り初め、逢ひ初めし夜が縁ぢやもの。心と心が合点なりや、へ指切り へ髪切り へ入墨子、へ野暮な起請も神々々さんへ、お世話をかける筈もなし、ああ辛気辛気。口舌洲崎の嵐も晴れて、富士を頂く翌の夜は、へ佃の雨に千鳥啼く、恋しさよ床しさよ。都の風の吹かまほし。
へ時去り時移り、朱の鳥居の有難や。是ぞ名に負ふ八幡の、宮居涼しき幣とりあへず、
合、へ神をいさめの神子の鈴、振るや振る降る二軒茶屋の暮の雪。聞きしに優る八景は、
面白や面白や。へあれあれあれを見渡せば、沖の鷗の彼方へひらり、此方へひらり、
漁る業や曳く網の、いともかしこく見えにけり。



解説

花筏

小唄連盟のご祝儀曲。

明治は遠く

この小唄は伊東深水が明治の浅草を懐かしく唄ったもので、「十二階」は明治二十二年に作られた東京名物「凌雲閣」のこと。「江川の玉乗り」は十二階の前にあった軽業小屋、娘達が玉に乗って廻る曲芸、「珍世界」は浅草六区にあった珍しい見世物でX光線と称し掌の骨を透視して見せ人氣がありました。「電気館」は六区で歴史の古い映画館。「瓢箪池」には噴水や中の島に茶屋がありました。「花屋敷」植六という植木屋が開演した娯楽場で、園内には金閣寺を模した建物や、象や熊のいる小動物園や見世物がありました。「山雀芸当」は山雀という鳥が「葛の葉子別れ」などの芝居を演じ、「ダークの操り」はダークという外人が広めた西洋式操り人形。「安本亀八生人形」は菊人形で当時のスター達を並べて話題を呼びました。「奥山」は観音様の後方の地内を指し、見世物小屋や大道芸人が軒を並べていました。「早取写真」はテント張りで十五分で仕上げ、



詞章

花筏（小唄連盟若樹賞受賞者の演奏）

新しく結ぶつどの花筏

固きちぎりに三味線の音も冴え渡る

日本晴れ変わるまいぞの約束は

千代田の松の千代かけて長く栄えん

唄の道づれ

明治は遠く

浅草の昔なつかし十二階 江川の玉乗り珍世界 活動写真は電気館 瓢箪池には亀や鯉 山雀芸当花屋敷 ダークの操り

写真はガラス板で木の枠に入っていました。「売卜者」は大道易者のことで、「松井源水居合い抜き」は居合抜きと曲独楽で人を集め、齒磨粉や齒の薬を売っていました。「砂絵の婆さん」は色とりどりの砂で客の注文で地面に砂で絵を描き投げ銭をもらっていました。当時の浅草が東京でも最も大きな歓楽街であったことが窺える曲です。

雪は深々

安政年間の江戸端唄を明治になって、三世清元齊兵衛が江戸小唄に作曲したもので、今夜は雪だから客も少なからうと、郭へ遊びに来た客が、花魅を待つ間、どうせすぐには来まいと思いがちながらも、矢張りなかなか寝られないという気持ちで唄ったものです。

座敷や引け過ぎ

これも前曲同様明治期の郭の同じ情景を唄っているが前者は歌沢調でしっとり仕上がっており、あとの座敷や引け過ぎは、落語を聴くような枯淡な趣きのある酒落た江戸小唄となっており、小唄ならではの面白さが鑑賞できます。「不寝番」は郭で行灯の灯皿に油をさして部屋々を廻る不寝番の男のこと。

安本亀八生人形 観音様の奥山は 早取写真に売卜者 軒を並べて客を呼ぶ 松井源水居合抜き 砂絵の婆さん地に描く 明治は遠くなったもの

雪は深々

雪はしんしん 夜も更けわたる どうせ来まいと真ん中へひとりころりと肘枕 何刻じゃ ああ寝入られぬ

座敷や引け過ぎ

座敷や引け過ぎ 床にはひとり そこでどうじゃいな 廊下ばたばた 障子をさらり きやつ来たかとそら寝入り「エッへへへッへお油さしましよ」寝ずの番 小腹立つ間にグリーン明の鐘

梅は咲いたか あさりとれたか

梅は咲いたか桜はまだかいな 柳やなよなよ風しだい 山吹や浮気で色ばかり しゅんがいな あさりとれたか蛤やまだかいな あわびやくよくよ片思い さざえは愀気で角をだす しゅんがいな

新内節 十三夜

浄瑠璃 岡本宮之助

三味線 鶴賀喜代寿郎

上調子 岡本文之助



岡本宮之助（おかもとみやのすけ）

岡本流後継者として大伯父岡本文弥、五世宮染に師事。邦楽家平井澄子先生に薫陶をうける。岡本以外では演奏不能な多くの古曲も含め新内節古典浄瑠璃、文弥作品を正しく継承。創作活動にも積極的に取り組んでいる。新内節保存普及に奮闘中。



鶴賀喜代寿郎（つるがきよじろう）

今村昌平の横浜放送映画専門学院演劇科第一期生。昭和五十三年に鶴賀喜代寿に入門、五十四年に名取。新内節三味線のほか、新劇関係の作曲・演奏でも活躍。母校の講師も勤めている。

解説

明治二十八年（一八九五年）十二月の「文芸倶楽部」に発表された樋口一葉二十三歳の作品。お関は夫の不行跡に絶望し実家の父母に離婚を訴えるが老いたる父の励まし慰めに反省して婚家へ戻ると乗った人力車の車夫が初恋の幼なじみの録之助ではないか。二人は驚き喜びつつも人生の不思議無情の身にしみる今宵旧暦十三夜。文弥作品は昭和三十年（一九五五年）二月発表。原作の名文章をそのまま生かすよう心がけつつまとめました。この年の元日に文弥生まれたことも奇跡。―― 岡本文弥解説より。

演奏時間の都合により一部割愛しております。

詞章

十三夜

へ今宵旧暦十三夜 月見の団子こしらえて 好物なれば少しなりとも食べさせたいと 勿体ない親心 その親心なおざりに 夫の影口 身の苦勞 泣いてくどいて今日限り 離縁と覚悟極めしを 老いたる父が涙の警め

「お父っあん おっ母さん この次ぎには 笑ってまいります
へ格子戸くぐれば 顔に袖 晴れ渡りたる月夜みち 車はいつか遠ざかる

へ風吹き過ぎる十三夜 虫の鳴く音のたえだえに 上野は別けて寂しきに 車夫はびたりと 梶をとめ

「誠に申し兼ましたが 私はこれで御免を願います 代は入りませんからお下りなすってください

「もしや お前さんは アノお方ではないか 私をよもやお忘れなさるまい

へト車より すべるように下り立ちて つくづくと打ち守れば「オオあなたは斎藤のお関さん 面目ないコンナ姿で

「マアいつからこんなこととして よくソノか弱い身に障りもしませぬか 今も私は 折ふし小川町の勧工場に行きまする

度毎 元のお店がそっくりそのまま 同じタバコ店の 能登屋となつていまするを いつ通つても覗かれて アア高坂の録さん

へ心やさしい方なれば かかる浮世にどのような 世渡りをしておいでなかと おなつかしやト涙ぐみ わが身の程も打ち忘れ 話しかくれば 汗をふきふき

「お恥ずかしい身に落ちまして 今は家というのもござりま

せぬ 寢所は浅草町の安宿 村田と言うが二階に転がって
 気が向いた時は今夜のように遅くまで引くこともありする
 し 厭と思えば日がな一日ゴロ／＼として烟のように暮らして
 いまする あなたは相変わらずの美しさ 奥様におなりな
 されたときいた時から それでも一度は拝むことが出来るか
 一生のうちに またお言葉を交わすことが出来るかと 夢
 のように願うていました よく私を高坂の録之助と覚えてい
 てくださりました あなたと言うことも知りませぬのでトン
 ダ我侬の不調法 さ お乗りなされ お供をしまする
 「知らぬうちは仕方なし 知ってそれに乗れますものか
 それでもこんな寂しい所をひとり行くは心細い程に 広小路
 へ出るまでただ道連れになってくだされ 話しながら行きま
 しょうト
 へ小棲すこし引き上げて 塗下駄の音寂しげに お関はいと
 ど物思い あの頃のコノひとは 烟草屋のひとり息子 コノ
 ひとに思われて 顔を合わせる度毎に 末は女夫と若い同士
 胸躍らせていたものを 魔でもさしてか浅ましい 自棄遊び
 の底ぬけ騒ぎ さてもさてもの変わりよう 木賃泊りになり
 下がり 車を引いてほそぼそと 有るか無きかの有様は み
 な私ゆえの身の破滅 女ごころのとつおいつ いつか上野の

広小路 三橋に近く来たりける
 へお関は紙入れより紙幣幾らか取出し 小菊の紙にしおらし
 く包み
 「録さん これは誠に失礼なれど 鼻紙なりとも買ってくだ
 され 久しぶりでお目にかかって 何か申したいことは沢山
 あるようなれど 口へ出ませぬは察してください デハお別
 れに致します どうぞ以前の録さんにおなりなされて お立
 派にお店をお開きになります所を見せてくだされ 左様なら
 ばト
 へ挨拶すれば録之助 紙包み押し頂き
 「お辞儀申す筈なれど あなたのお手よりくだされたのなら
 ば あり難く頂戴して思い出にします お別れ申すのが惜
 しい と言ってもこれが夢ならば仕方のないこと サおいで
 なされ 私も帰ります 更けては路が 寂しうござりますぞ
 へ空車引いて うしろ向く それは東へ これは南へ 大路
 の柳さびしく靡く 塗下駄の音遠ざかる十三夜
 流しにて了

義太夫節 壺坂観音霊験記

つぼさかかんのんれいげんき

沢市内の段

ざわいちうちだん



沢市 竹本土佐子
 お里 竹本土佐恵
 三味線 鶴澤寛也



竹本土佐子（たけもととさこ）

平成十二年重要無形文化財義太夫節保持者総合認定。昭和二十三年竹本土佐尾に入門、六十一年竹本土佐廣に入門、平成十七年豊竹嶋太夫門人となる。二十四年旭日双光章受章。二十五年厚木市民文化賞受賞。



鶴澤寛也（つるざわかんや）

平成二十一年重要無形文化財義太夫節保持者総合認定。十三年清栄会奨励賞受賞。十六年伝統文化ボーラ賞奨励賞受賞。鶴澤寛八に入門。昭和六十年初舞台。平成十九年より鶴澤清介に師事。「はなやぐらの会」主催。



解説

西国三十三霊場の一つ、壺坂寺を舞台にした浄瑠璃で、福池桜痴の作といわれていますが、二世豊澤團平の妻千賀が加筆し團平が作曲、その後改作して明治二十年（一八八七）に大阪稻荷彦六座で初演され人気を博しました。盲目の座頭沢市と献身的につくす妻お里の夫婦愛の物語です。疱瘡から盲目となった沢市は、お里が毎夜七つ過ぎに家を出るのを不審に思い、ある時遂に問いただきます。するとお里は、沢市の目を治したい一心で、眼病に御利益があるという壺坂の観音様に、毎夜祈願していたことを打ち明けます。沢市はお里を疑った己を恥じ、二人で観音様にお参りに出かけます。（本日ここまで）観音様のある山中に籠もる沢市を残し、一旦家に戻ったお里。再び山に戻ると、将来を悲観し身投げした沢市の姿を発見し、お里もあとを追います。そこへ観音様が現れて、お里の信仰心と夫婦愛を讃え、二人の命を助け、沢市の目も治したのでした。



壺坂観音霊験記

沢市内の段

夢が浮世か浮世が夢か、夢ちよう里に、住みながら、住めば住むなる世の中によしあし曳きの大和路や、壺坂の片辺り土佐町に、沢市という座頭あり生れついたる正直の、琴の稽古や三味線の、糸より細き身代の、薄き煙の営みに、妻のお里は健やかに、夫の手助け賃仕事つづれさせちよう洗濯や、糊かいものを打盤の、音もかすかの暮らしなり。

へ鳥の声、鐘の音さえ身に泌みて、思い出すほど、涙が先へ落ちて流る、妹背の川を

「オ、これはく沢市様。今日はなんと思つてやら、三味線出して、よい機嫌じゃの、ホ、、、」

「オ、お里か。そなたアノ、おれが三味線弾くをよい機嫌に見ゆるかや」

「アイナア」

「ハテナア、おりゃそんな氣じゃないわいの。モウモウ氣が詰つてくっいっそ死んでも退きよう」

「エ、」

「イヤサアノ死んでもうほど、氣がふさいでならぬわいのう。コレお里。わしゃそなたに、チト尋ねたいことがある。マ、ここへおぢやく。ハテまあここへおぢゃいのう。ほかのこどもないが、いっぞは聞こうくと思つていたが、丁度幸い。光陰矢のごとしとやら、月日の経つはア、はやいものな。ソレわが身とおれが、コウ一緒になつてからモウ三年。稚な時より許嫁。互に心も知つてゐるにマなせ、そのように隠しやるぞさっぱりと打明けて、言つてたも」

とどこやら濁る詞のはし。お里はさらに合点いかず不審ながらに

「コレ沢市様、そりやお前なにを言わしゃんす。嫁入りしてから三歳の間、モほんにく露ほども、隠し立てしたことはござんせぬが、それともになんぞまた、お氣に入らぬことあらば、言つて聞かして下さんせ。サそれが夫婦じゃないかいな」

「ム、そう言やればこっちも言おう」

「オ、なんなりとも言わしゃんせ」

「オ、言わいでか。コリヤお里。マよう聞けよ。われと夫婦

になつて丸三年。毎晩七つから先、ついに一度もいたことがない。ソリヤもうおれはこのような盲目。ことにえらい疱瘡で、モ見る影もない顔形。どうでわれの氣に入らぬは無理ならねどほかに思う男があらば、さっぱりと打明けて、言つてくれたらこのようになんの腹を立とうぞい。尤もわれとおれとは従兄妹同士。もっぱら人の噂にも、アノお里は美しいくと、聞く度ごとにおれはもう、よう諦めているほどに、愠氣は決してせぬぞや。コレどうぞ明かして言つてたも」

と立派に言えど目に漏る、涙呑込む盲目の、心のうちぞ切なけれ。聞くにお里は身も世もあられず、縋りついて

「エ、ソリヤ胴欲な沢市様。いかに賤しい私じゃとて、現在お前を振捨てて、ほかに男を持つような、そんな女子と思つてか。ソリヤ聞こえませぬ聞こえませぬ聞こえませぬわいな。モ父様や、母様に別れてから伯父様のお世話になり、お前と一緒に育てられ、三つ違いの兄さんと、言つて暮しているうちに、情けなやこなさんは、生れもつかぬ疱瘡で、眼かいの見えぬその上に、貧苦にせまれどなんのその、一旦殿御の沢市様。たとえ火の中水の底、未来までも夫婦じゃと、思つば

かりかコレ申しお前のお目をなおさんと、この壺坂の観音様へ、明けの七つの鐘を聞き、そっと抜け出でたゞ一人、山路いとわず三年越し。せつなる願いに御利生のないとはいかなる報いぞや。観音様も聞こえぬと、今も今とて恨んでいた、わしの心も知らずして、ほかに男があるように、今のお前の一言が、私は腹が立つわいの」

と口説き立てたる貞節の涙の、色ぞ誠なる。沢市涙にくれながら

「オ、過分なぞや女房ども。そうそなたが一心の、据った上は御仏の、枯れたる木にも花が咲くとやら、見えぬこの目は枯れたる木。ア、どうぞ花がさかしたいな。と言うたところが、罪の深いこの身の上。せめて未来を」

「エ、」

「イヤサアノ女房ども。手を引いてたもいざ〜」

と言うに嬉しく女房が、身拵へさえそこ〜に、労わり渡す細杖の、細き心も細からぬ、誓いは深き壺坂の御寺を、さして



長唄 元禄風花見踊

げんろくふうはなみおどり

唄

杵屋三左衛門

東音味見純

杵屋三七郎

杵家弥佑

杵家弥七

杵屋弥佑

東音高橋智久

芳村伊十治郎

囃子 笛 望月美沙輔

小鼓 望月左京

小鼓 望月左喜三郎

大鼓 望月左吉

太鼓 望月左之助



杵屋三左衛門（きねやさんざえもん）
昭和三十五年生まれ。昭和四十二年、初代杵屋三左衛門入門。昭和五十三年、杵屋三七の名を許される。昭和五十八年、東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。平成十四年、初代杵屋三左衛門より三代目杵屋三左衛門を許される。長唄協会理事。



杵家弥七（きねいえやしち）
昭和二十三年、五世杵家弥七の長男として東京に生まれる。前名、弥佑。昭和三十三年、初舞台。昭和五十八年、六代目家元を襲名。杵屋栄二、堅田喜惣治らに師事。長唄協会常任理事。「キッズ伝統芸能体験プロジェクト」委員長。



望月左吉（もちづきさきち）
邦楽囃子方。
昭和三十八年生まれ。幼少の頃より父三世望月左吉より手ほどきを受け、六歳で初舞台。平成十四年森下派四世望月左吉襲名。長唄を主に様々な演奏会、舞踊会、テレビ、ラジオ出演幅広く活動している。東京芸術大学非常勤講師。



三世杵屋正治郎作曲、竹柴瓢助作詞、
明治十一年（一八七八）六月七日・八日、東京新富座新築落成の開場式に初演されました。

元禄時代の上野の花見風俗を描いたもので、全曲二上りで通した華やかな作曲となっています。「明治百五十年」がテーマと伺い、最も明治らしい曲として、選曲致しました。一説によると、正治郎が明治四年に聞いた軍楽隊の演奏により、従来の邦楽には無かった三拍子やフーガ形式、表間のハジキから始まる旋律などが、新しい表現として取り入れられているといわれております。当日は、演奏者を除く役者、劇場役員、スタッフなど全員が、燕尾服姿で観客にご挨拶したという話も、残されております。



元禄風花見踊

二上りへ吾妻路を 都の春に 志賀山の 花見小袖の縫い箔も
派手を鎌輪ぬ伊達模様 斧琴菊の 判じ物 思い思いの
出立ち栄え へ連れて着連れて 行く袖も 唯んだ振れ振れ
六尺袖の しかも鹿子の 岡崎女郎衆 裾にハツ橋染めても
みたが ヤンレほんぼにそうかいな そさま紫色も濃い ヤ
ンレそんなはそうじやいな 手先揃えてざざんざの 音は浜
松よんやさ へ花と月とは どれが都の眺めやら かつぎ
目深に 北嵯峨御室 二条通りの百足屋が 新奇凝らした真
紅の紐を 袖へ透して繫げや桜 足田鹿子の小袖幕 目にも
綾ある小袖の主の 顔を見たならなおよかる ヤンレそんな
はへ へ花見するとて 熊谷笠よ 飲むも熊谷武蔵野で御座
れ 月に兎は和田酒盛の 黒い盃闇でも嬉し 腰に瓢箪毛巾
着 酔ふて踊るが よんよんよいやさ へ武蔵名物月のよい
晩は 岡田鉢巻蝙蝠羽織 無反角鰐角内つれて ととは手細
に伏せ編笠で 踊れ踊れや 布つく杵も 小町踊りの伊達道
具 よいよい よいよい よいやさ 面白や 入り来る入り
来る桜時 永當東叡人の山 弥が上野の花盛り 皆清水の新
舞台 賑わしかりける 次第なり

本日のナビゲーター

平野啓子（ひらの けいこ）



語り部・かたりすと
元NHKキャスター
音響や照明、季節の風物を取り入れた空間エンターテインメントとしての「語り」を創造した。素語りや和洋楽器とのコラボレーションも行う。
NHKニュースおはよう日本のキャスターや大河ドラマ「毛利元就」の語り、教育テレビ「伝統芸能鑑賞入門」聴き手、など多数の番組に出演。NHK芸術劇場「平野啓子の語りの世界」でギャラクシー賞奨励賞（個人・番組）、舞台「平野啓子語りの世界」で平成九年度文化庁芸術祭大賞受賞。平成二十二年度文化庁長官表彰。平成二十六年文化庁文化交流使として海外で日本文学を日本語のまま伝える。手話語りや複数言語での輪誦語りを開発。「語り」で地域振興や、震災復興応援も行っている。「走れメロス」（ユニバーサルミュージック）、「平家物語」（ハゴロモ）等、語りのCD、DVD多数刊行。近著に「語り文化を世界へ声で伝える日本文学の旅」（時鐘舎）。

本プログラムの詞章は実際に演奏される部分のみの掲載となっております。
全曲分の歌詞をお知りになりたい方は、それぞれの協会までお問い合わせ下さい。

邦楽実演家団体連絡会議（事務局 日本三曲協会内）

一般社団法人 義太夫協会	事務局	電話 03-6265-1880	http://www.gidayu.or.jp
清 元 協 会	事務連絡所	電話 03-3739-6765	http://www.kiyomoto.org/
一般財団法人 古曲会		電話 03-3431-3336	
新 内 協 会		電話 03-3260-1804	
常 磐 津 協 会	事務局	電話 03-3636-2220	http://www.tokiwazu.jp/
一般社団法人 長 唄 協 会	事務局	電話 03-3542-6564	http://www.nagauta.or.jp/
公益社団法人 日本三曲協会	事務局	電話 03-3585-9916	http://www.sankyoku.jp/
日本琵琶楽協会		電話 03-5371-0120	https://nihonbiwagakukyokai.jimdo.com/
特定非営利活動法人 筑前琵琶連合会		電話 0467-51-9798	https://sites.google.com/site/chikuzenbiwanpo/
公益社団法人 日本小唄連盟		電話 03-5641-0830	http://www.kouta-renmei.org/
一般社団法人 大阪三曲協会		電話 06-6245-0366	http://3kyoku.com/
一般社団法人 関西常磐津協会		電話 06-6214-0753	http://www.kansai-tokiwazu.com/
公益社団法人 当道音楽会		電話 06-6768-1913	http://todo-ongakukai.jp/
名古屋邦楽協会		電話 052-229-8980	https://sites.google.com/site/hougakunagoya/

次回の邦楽演奏会は平成31年3月30日（土）を予定いたしております。